



集義外書卷七

13  
86  
脱漏四

一仁友向貴亮モ一政モ一給て大簡カレ人道の教化主牛

馬同レザントヤ者ウ云禮儀立人道義カレ易簡なる

そのあやまこと易簡の意と云今之禮儀主云もは多事あねり  
多事あれを減らすくわゆて教を由承そも御上人方の充

きまつる向易簡カレ太礼立主云え云無位士官の

すもむづのと馬帽子をもきちつまつ刀の風儀とたはけ

人道の更礼儀の神と云々トカ物を云は傳説の法を立ヒテ乃

ハナスニテヨシモアリ也正礼儀アリトモアリ者云甚矣もあひて曰

物を用へ今それ衣をなす小袖あらじきと毛筆のをなする  
のめりれ有二つ裏付との上に多あちひき刀をもてて見る  
刀獨技大中小をあれ汝は敵とは弊れたりとすか  
ものももるゝゆゑもく文をもるゝな軍陣よりうちまつて刀と  
名付まよとす刀とぞれり人より附ふるを理とすとす  
國賓軍賓とぞれりとぞれきて治世久くさん 因今の財とす  
さんと云ふとよむとす せうとすと文とわと脣とす  
向其體へゆきや 云實體と下の風俗實體とぞれ流れりと  
そくとす財勢と生ずる 一 向さんと云實體の風俗と生ずる  
云易簡と實體の體と春伯の事よりてれ儀とぞもあらうと  
實體とぞれりとぞれりとぞれりとぞれりとぞれりとぞれりと  
實の風俗とぞりゆかの者へ取ともひづくとぞとぞとぞと  
曰くとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
崩れと  
崩れと化せんと一 かく人の眼目と刺て仰へ申めのとと  
ものと信とせんと 信教と仁義と  
後代よりて中古の礼教とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
とをする者と仁義のちうる 一 とととととととととと  
而々仁義あとがてこれ對し仁義の體をかくる文と壁とをせき  
文とをせきする経のとくとまよとぞとぞとぞとぞとぞと

忠と多く高き事とまじ周をうそそよ忠事と後壁あり壁ありて  
後子文ありもあらすよ忠事よ道也と用あり古ちから忠事ありと  
古て久遠えの忠事人々のれいと忠信あり人ゆし被髮而  
足と忠事もそんがは後世の文海の時とて左右の風とりて  
あざれ人を牛馬と牛馬とてちるのをもと有中古から忠信有  
忠信有へ心人面とて 周の國世と忠信とす二室之事  
ニヨトモニアキアリ忠信なり又賢を財の宣し今のは又忠信と  
あく一物とぞも之を易事はすま財し今のは周の忠信  
ちあるものは仁義を信用換して人面忠信とあざるを今又左古より  
帰へ忠信人をもとめのと見し 同世も古のことを忠信人をもと  
り

今の人々人面忠信とぞひばを古人のひと角りと生して牛頭仰みれ  
かに仁義礼智信の神々と仰みり今の人を形と今人の仰みれまし  
不仁不義不禮不智不信を無ありとあると今歎うれいの仰み人面と  
石俗と忠信とあざるをもとめり 玄徳義と名ふにあらとて牛馬  
よりと二事と古を天地造化の工とて始むとて形と  
ゆゑあるあらと人面忠信の元ありとちも有き忠信と人面忠信の體と  
後世は鬼神の工化とて形と人神合一と忠信の風俗とて  
人の如に真人形のもとくられゆきと會忠信とて有ねよ予よ  
を古の人と忠信人をじ中古の人と人面人合と後世の人と人面忠信と古  
中古ととてあらりの有とあらて財なり今は財よ忠信のなきことせら之事

多物かへて氣力也。貢用あはせむのちとて併為へてふと  
人面獸心と云ひよまほ禮儀と以てを事。今まほ止む所也。  
さうすまほすなりて併大をもん今の時も當て仁政を行ふと然うが  
生きるよまほの數並べて仁義を教へるのを事。多物  
を滅へて易爲たゞ一をすすむを爲すもして事無とぞ  
來一ト一め一ト一のやうとして後人のえ力也。貢用あはせ氣力生一  
天性令き一ト一め一ト一後人の徳の仰除く也。一てよなめて始て人を問う  
財用もとて礼義の則をもつて人能あらず。け財用もとて教あらず  
礼義もとて多きよ人の徳と。宣るよめと。もと。一あるきと  
皆水をもと。 同何とく人の徳と。同衣服文章これに焉留すも  
いと。まつづり刀口目中の水をするの人爲し始く人の神真久人道の禽獸。一  
黒字の文の文章をも何と云。同財を徳よりもれ取くね。次才より  
やもく。一とさるよも。事々次才より多くあらざれ。孔てこあらね。友  
或と見て恭敬の心もあることあらば。不恭へし歟もしくて孔てこあらね。友  
まつかり財を知り。 お若を財をなるや。 丈或と易きもの若  
とあらとなら。 じつとまきと作わして人よも。此へ人財。  
恭候の財をえんとやうと恭とあらば。あはねよ人財。此へ治道の要。  
間禮樂をもう。一。 財と用意だ。 云人財或も別れ。 併事も  
居たり。 代へる。 まほのほか。 楽と。 まほ秋を。 大雨の潤あらア十二の律呂  
あり。 十二月ニ死を。 あら葉花の西音。 今。 の三季ニ行。 三のうち。 わの

中うちきよてもんのより次第。まことに  
のこりてたす角でゆきを。甚句白き事わざ。甚道くゆくされ  
ちよき毛れ葉なきて人道。水と見瀧。水洗も久たる事無  
は理と知て。今。何そ禮儀と礼アと人道と半ばよ内。くちもとと  
欲せんや。また日中の水を。すまし今。の時よ。死。——我方の位とまうやうて。対候  
と。うんとね。おのこを。政のと。娘を。うふ内病有何。そありうん。まくは  
浦原。ぬまえ

一心友問貴老志をひて政としにまづはば法とぞ退ひさんや  
不成にて事とさんも本直よりてあざけつらうとくとくゆふるも  
むすりて予くふ徳のえ政をあすきや又何の志をひくとえずりあんを  
骨立軍將あつて弱能く古今の名虜人庶民多の見聞といひ日新政の  
やとをもんの仁政行ふと時々士大夫の附とひ庶人百姓人の時とひ  
やがの附とひと名をかよぬまつて何の因縁とあらわんや其豈  
素のじとひと人のよくあらきあらきあらき

聖名へより佛廟の時とひそ四天王もとを守る  
云佛法の作法より多くて仏教の時といふにはやむ  
今の佛法と聖名と聖心を有すと名跡と申す  
か仏法の心と有する有り佛法破滅の時と今てやうと次第に達磨破  
て今れども凡ての如きは是と云ふ所をとゆる  
聖道は  
王道也王道も大通じ大通じ大通じ  
大通じ大通じ大通じ大通じ大通じ大通じ

小説の事——是爲の事——川流か——鉄道も大海の事——皆更て  
辯を取るの事も幾處かありあらん防き退くと曰——やうの事  
同様又中白氏後草の事——世の多くは後草と云て湯傷院伝  
とある事か——四種化性と云ふ事もあらまし人の事も傳え  
侍り　云中白氏傷寒一派と云ふ事もあらむ後草も婦人の事も書  
矣——此見之多也——中白氏法の事もとをきまう他の事も書  
焉——此見はお墨子の事もとをきまう他の事も書  
蛤の事——其事はお墨子の事もとをきまう他の事も書  
事も書すアラ松浦と退——次第とせば彼もさう思  
は有事に退もあらん事じやくと退て秋山と云ふ事も書  
乃翁傳やむとれまし——同程未の退う程——ハ船を去  
易主の時所傳あらん今の易主の時改と考人の事もとを退——  
向今私臣の法——うり傳と化法とそあくことより是事も傳え  
うは承傳法も傳え——程子も嫡を弟也の事も云ふ事も書  
事もあらん事——云其時の事と今とは名別——泰漢  
後聖人から教の人傳用の事と云ふ事もとあると云ふ事も書  
其事も傳の事——海との内理と云は事も傳えの事も書  
事もあらん事——ううと氣變も云ふ事も書えが事も書  
乃翁の神廟と吉事も書え——あと人傳用と云ふ事も書え

一因志と云ふ。昭和五年天下の窮屈ありまゐの間からて民の  
民本主義、五穀あると云ひて天穀の中へよきを取れり。民力はもと功の體よ

あくまで有徳の臣有道の臣も代の日を舒みて長く正直も行ひ  
ヨリも力強きはからず道もきさせの間をこそとて經て至民  
もと勢て力を失ひ方々の兵船をもすに於て思へる民もつねに兵  
や一上富くやれあまほ短きよはせよ社國富足うり生——盜賊は貧窮  
より起るもの、富足と寛順あり生——多病富貴うり起きて夜は  
居人を力を喪のやか——圓の基うること細か極て浮侈篇ニテ王者以四  
海為家兆人萬字一丈不耕天下受其飢一歸而藏天下安其至也アリ  
後世の業より因革多——利もあきらめぬよとすくあと近き利潤  
牛の筋アリテモトロヒとねらものすれど浮食者もあ——故ニ主弱事ニ至  
弊下の弊危険アリテニモ高貴牛馬道海ヨリハ死がたハ高貴日ニ富く  
武士富くし食えがん武士食えまば百姓アリテ困窮せん百姓アリテ  
游民ナキアリ也——今古次第ニ角争ひて莫年ニシテナカニモアリテ  
古人の云貪生富弱生疆祀生祀危生安と云ふ人を福を凌ギヤリテ  
富とも奢とも節を失ふも貪——物法ナリテ人よ諸省を必弱とも没成  
れて徳を失ふも必ず乱を安キアリと考微と不作為を必危——  
君の色ハ失意の胸トモレバ——身をよろび——事行はせば豈アラクセヨ  
タクシナリ功を失ひ妻の面も失ひと見て御微の胸止——夫モ  
玉免人多く詔アシム——却ら彼の妻とすくのと共やめき甚——ハ功を  
失ひ甲斐ナシム——却ら彼の妻とすくのと共やめき甚——ハ功を  
失ひ易ム云意氣え倍え旨——少心も人の敵を初止む財ハ易ルト

今世人の人の欲求で、鹽なるを近づけ財をもつてとて止まざりき  
の道あるを是き也。將もつて甲斐有(アシ)刑の初からもは確乎ある  
上あててやくか——國の刑民もうちれ、民の困窮也ゆゑ國の刑も始  
昌云山附於地刑上以厚下安尾是刑<sup>ミサキ</sup>を止の道しもの民よ附き山の  
地よ附き——地厚也れハ山難か——地薄也れトテうこあれば  
山もあちくらべてくらひが又刑<sup>ミサキ</sup>を厚す退き少人多の如く少人多も附せ因ふ  
詛多<sup>タマ</sup>にけ放す地中奪財を因下刑<sup>ミサキ</sup>を厚す其次には士刑<sup>ミサキ</sup>を厚す其次  
トは公產刑<sup>ミサキ</sup>を厚むめびやる附<sup>ミサキ</sup>を厚す次第<sup>ミサキ</sup>を厚す而て  
之をとくらもの。今之武士民<sup>ミサキ</sup>はくわくとぬてゆくつめ<sup>ミサキ</sup>を厚す而て民の  
刑<sup>ミサキ</sup>を厚むに次<sup>ミサキ</sup>はこゝ<sup>ミサキ</sup>よりとくらみの刑<sup>ミサキ</sup>を厚むにくらひ  
之をとくらみの公產を主<sup>ミサキ</sup>の刑<sup>ミサキ</sup>ハ國を取主<sup>ミサキ</sup>を初て成するのちもまことに  
はきる。即ち日運氣衰<sup>ミサキ</sup>——天食也<sup>ミサキ</sup>するもの<sup>ミサキ</sup>の刑<sup>ミサキ</sup>——是のを若  
小<sup>ミサキ</sup>て母<sup>ミサキ</sup>を失<sup>ミサキ</sup>、名別<sup>ミサキ</sup>——愚遂<sup>ミサキ</sup>なくて失<sup>ミサキ</sup>するもの<sup>ミサキ</sup>の刑<sup>ミサキ</sup>——是のを若  
山<sup>ミサキ</sup>とも<sup>ミサキ</sup>とも<sup>ミサキ</sup>一<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>もの<sup>ミサキ</sup>の象<sup>ミサキ</sup>——山の木草<sup>ミサキ</sup>は木<sup>ミサキ</sup>を<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>あつも  
山<sup>ミサキ</sup>あつも<sup>ミサキ</sup>人の面<sup>ミサキ</sup>を失<sup>ミサキ</sup>して<sup>ミサキ</sup>よ<sup>ミサキ</sup>る——申裏<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>渭濱<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>  
甚<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>アモ<sup>ミサキ</sup>玉<sup>ミサキ</sup>と<sup>ミサキ</sup>桂<sup>ミサキ</sup>と<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>  
山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>水<sup>ミサキ</sup>の山<sup>ミサキ</sup>の草木<sup>ミサキ</sup>は木<sup>ミサキ</sup>を<sup>ミサキ</sup>神鬼<sup>ミサキ</sup>うすく流水の次<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>  
山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>水<sup>ミサキ</sup>の山<sup>ミサキ</sup>の草木<sup>ミサキ</sup>は木<sup>ミサキ</sup>を<sup>ミサキ</sup>神鬼<sup>ミサキ</sup>うすく流水の次<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>  
山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>水<sup>ミサキ</sup>の山<sup>ミサキ</sup>の草木<sup>ミサキ</sup>は木<sup>ミサキ</sup>を<sup>ミサキ</sup>神鬼<sup>ミサキ</sup>うすく流水の次<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>山<sup>ミサキ</sup>も<sup>ミサキ</sup>

大源と封を有す者ありて藩の山川とへりとまゝ天下の源  
とゆふよ。其の長久と。民生と甚しき事と紀一ノ石ニテ  
ちくに仁政をもとと去る傍りて水田澤とあつまリ初夏と純陽の月  
なまは日てうへて春化より宵と朝代の更とくと是れの不  
アセキムラを氣化のる。六七月、天地の氣と更氣化のゆゑに氣化  
と次に二月ハタミ若田島と表し草あとめじ冬のほり神氣限  
あと山澤氣と通一雷風お助の事。神風の行經と拂良例の流  
色と有るね忍の上見かのタキと神氣を拂良と清風を拂  
立木の表の海列と小豆瀬より毎年さく。御子は四年ね十年ハ清風小  
豆瀬よりタキてさく。さきにまきは無だ見り。あそ田保レミ島わ  
きぬねけはのえ民らのとね十年の後と黄千方と云事。か  
二種ある。一て神氣う手をもと雷風をと紀。まちくか  
むく。もうけ理と。かて二種ある。まちくは拂良例のね十のふ穀の生  
き方信と云。まちく。且と民を生まく。まちく。まちく。まちく。ま  
得て。か氣序。と。病れる。まちく。まちく。まちく。まちく。ま  
二種のあき。まちく。まちく。五穀の減。か病。まちく。ま  
その減。か。あ。か。まちく。まちく。まちく。まちく。ま  
け理と。まちく。老を。か。か。か。か。まちく。ま  
日。まちく。まちく。まちく。まちく。まちく。ま  
そや。云湖の神氣は。まちく。まちく。まちく。まちく。ま

其上かよはすとてはよ多きがまくあらそひともちる名前をうかぐれ  
君氣有り法源のときは草あるあまきは神氣もこじらと草本なれ  
神氣もうす一又附徳あま松山とゆめらとくらをまうなに松山事  
あきりても神氣のますけうせぬ一却う神氣と接せりすあり  
松山下草生を流水うきそめをねあつてある西高島より毒とな  
れりたる海浪をよおきのみじと難事よちく節一 同山と立山  
仁政のむなきは今こそ多よあらむとぞ 云ふ說とぞめりまほ  
くくもあゆす只今人食をよき事す一 然予著事と始め続ぎ  
れりくすむすと歟人の天知る仁政の事すとぞ是を得て後行當し  
シテ一 史書をみてけむとて松風を浴て南きりよりあひとけ後も  
又あらんか

一  
仁政向貴老の被仰身の池堤と他の害をもとて清と堅固をもと中  
仕事へ川堤とあへて化を換へゆき池の堤破損れ前乃處有ゆる  
え易云貴人在下信元輔是以動而有ぬ也と云け嘗ア軍地萬絆の  
君子のとあひ人皆天性有り人仰の是故のくらと既而有りゆゑとは  
賢人の如く人之常情のゆ長ちやくたる所水の如き筋筋、而う後者  
もくもくと川流たる所の筋筋も水きの如き筋筋、而う後者  
堀川堤とせんとわゆる所を所よ經たまつるを又才見ある者と仰ても居  
間他害をもとてあは一 わのあらぐるのがまきやううする

物別るの事とあらずまづる時とす。——事ありてかくゆる有り  
況々自家の改めにむけてもやむよ者大審も向て改め改ひ才を惜ひ  
うりもきこころれりあらき後世の人より向と敵とす故に嘗てハ野より  
きて移住附よ様に事よ方のたゞ多くなるも知縁の少處ハ三九  
帰の印ニシテ一玉の毛利まし歸す更にり人の印あれば望政令等ノ人情  
よしとす時事ニキシ事宣——まことを思ひ度せき——因爲うどもモ人ニ  
あらん時聞事も買ひ有つてても生きたゞらまことに——もよ  
なれども平人をかじりきり其まゝをかの所下の令宣れどもまのそ——只  
ふ人のあくとちうものあきは陽てうきて達せし上の令宣れどもまのそ——只  
時の種興へ思てあらう——こうも其事へ後世よりれか——他ふ  
如約とも上高理ゆ色也——まことに事と承のそ——もよ庵——  
雪賀の事と其人を仰て下向よ和経とは已ひ是人をかひりとて次  
のをかきも天下の才とありて治平の功とちとと至功德へとく嘗思  
雪賀の一人の才と仰せよ多幸と云ふ事と云ふ——是君の徳に  
是臣の功をうりとつて堯舜禹の君臣たりとありて萬時既に後世  
をめり四國を化けぬとすかくらるる名を取られたりのとれ  
万國よろき徳化四海ぬとすかくらるる名を取られたりのとれ  
の大名あらとこましも又ちくらるる名を取られたりのとれ  
事故自任其才若者適足のみか能取奉下之若役天下大體内則  
吉 程子云更以一人之勇除平天下も廣若區々自任豈能固於方

无斎不周是不自信事則其知大矣予ノ功高名流  
きく百姓の老人よ。たゞの其時てつゝもかとおれ  
向うへ四まの老耄より生ままで貴老を仰て初々  
仰るや。云是をゆきえあら。一に竟弟の智しやあやう  
先哲ともさりとれて居る。一めのね竟弟の時の老人をよむる。あ  
いはる。一に後輩人あら。一に今も昔をわらひ。あは天下の後  
才能あけて。ヤマニ。アリ。

一而反向家中作法アリ。一に作法。法度とあら。一に人  
作り法度。一に作法。法度とあら。一に人  
念候。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
愚へ。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
小人らは小人の時は法度ありとす。もちよぬも。一に。一に。一に。  
ヤマニ。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
人と考ふ。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
幸と。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
ク取ると。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
も。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
あら。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。  
御今。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。一に。

トアリ人情事あらざれど至りてそ詰ありと出ハたまき

一心友向正義傳書主のれようちひ宇ノアリヤシを被否の御お智音  
主の事も思きてねどもき仰せられの心もて御ゆく。けの親  
トゆう切の時より父を以テ一朝りりと彼事の心とてのゆり  
猶まことしやはせでござりかと申まへ氣味ありゆるをとて居  
やを命す。云是又義のうやあ。あくを歎言ス。詔書  
第十九号は國有。一後事取てと申内にうそにて爲え事可  
思ふ事てゆきのうだれと行ひかくとやうう仕し被御。唐元  
思ふとゆきのうとちゆきあひのうりを寧人思ふととくにきて  
所ゆきは秀激も思ひねども見ゆのれをふして寧人のあこ  
サキは飛り。一人にて思ふとゆき不穢に石頭のくらゑ事  
ても不思がく。寧人ゆかば秀激の思ひてしゆ事無くゆり  
祝の思ふもゆきゆきをすとおとおとおとおとおとおとおと  
ト。おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
仁義のゆきの間原。御下今のみ高らかども重音とゆすと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

あくとせようめい四アラハの思春よやうをなうがれすとまほん  
事ハシテ寒をかあるんあひ被り妻ますとそと男をやれて辱を受  
ひとふて被りともきは名前のみとそふゞよ天神の御ミてもみれ、船と鉛  
男氣ある君あしとおもふへまくねーとおもふもあり

一  
心友向國家よりあるるに事と云ふた貴老のきよゆるもつて宵はをひ  
してかくぢやうむかへ作らまほる用ひる御う翁あくちすとおゆり  
時わがの言えどもこれなりとくゆゑ(ま)  
云あせは才知のあくまし  
そがこりとて若きもと人のうちと用ひ  
云凡様あり活世を不疑うる  
人争ひ人ちよくめで云浦よめひぬを財へぢんもがつむ  
云浦やくさくて健やもめものし今の人後の人うづぬりともせらる  
ゆく凡あく死  
まんのせきになれをしなくて世人ひととく  
きこし高せとも志向  
く徳ある人古きよき志きくい徳ある人古  
不用世の活れぬてと令し才の及所  
也じ人生は徳ありれば病有り徳の  
病を手て徳とありじきの久  
徳の多まとても病とゆあき  
とありめの財へ流人とかものの爲  
育子多病)又あゆきあゆあゆ  
故モ要とのゆるの用意あつて  
一心友向故生百病と謂ふ者あら  
うるわざあくらうる  
愁獨も仰う  
云凡様より聖人玉音のま  
実事とそくは物のまよあやと更故ゆるのゆし万能皆敬貢て為と令かる  
タとゆうり故ちき財も為とあざぬよるまのゆすて、是す少人共と敬ゆる

尼室の不外不外にて自取ものと小人といひ独ど底もとの成居事と云ふ時  
獨立教のあきらめのう底独ど底人の力なくする處のニカラ時からくる不  
ありきじ已じくり知れど底とまじる事無くしてもあ事か  
向独立と底より口止せ——とするも又偏倚もすゞと云ひまじへ  
云必獨立と底の志方を以て主の主を主る所とたゞか  
南てこそ必情と生次

問独立とちとあるともそとまじて西とひ北と考  
東とまじて北と南と——則駁し事とまじやうは初事の事と考  
侍とまじやねどとちとけつ西と東と——初事とて  
父と母とにあづきてソリソリと次第上と下と教るものは大法の事と  
あと——かつの事とてちゆんとちゆんとちゆんと  
心術もやくの事とてありや

云あくまでかく教歎の独立の事——ゆゑす  
と云あくまでかく教歎の事——ゆゑすと云  
程あくまでかく教歎の事——ゆゑすと云  
うづづづ——獨立と學びてのべて豈の聲とる事無く  
而あきらし柳下あくまで外不參——と教歎の事——ゆゑすと云  
ニ——おきまじく教歎の事——ゆゑすと云  
仁者、主也我、事あくまで方ぬ已よ

因——

一友問ひうきは爲恭に——て天下平なるや 云是聖徒の事と云う黃  
帝竟無衣裳と——て天下平なる事と云う黄帝の事と云う  
故有り爲教——て天下平なる事と云う仁者、主也我、事あくまで方ぬ已よ

往まうねりぬ死生をかへ——高貴尊候ゆ雲か——お榮騒  
あらひてれどもかへ——私心かくぬふへ——松門か——浮遊の日々の  
弓のゆうと静なるは虚ふへ——ゆううう初と見ゆゆふへ——理とある  
知ゆうと手すらうはりけり景氣象とスナリ——萬葉かへ天下  
平也

集義外書卷之七

集義外書卷八

脱論立

一 仁友問養生の事——南へ不宣死されうて大事と云ふと  
あく——喪了否ハ云々のち儀じあるは御見の大簡やうともキのむを  
きくすまきのと人仰み何を帝竟と許ゆとめ——先取と云ふ度  
もくて大事とせよせむと——云ふ事と報日前と在る人より  
もとを教ぜると云ひ——死とがくまう以後、就あ在るの故と至るの  
御ゆううれし大事と云ひ——是とがくまう以後、就あ在るの故と至るの  
御ゆううれし氣力と——是とがくまう以後、就あ在るの故と至るの  
御ゆううれし氣力と——是とがくまう以後、就あ在るの故と至るの

大事ニシテキヤリヤ今之世トモトヨヒ多ニ名ナリセキトキノ利害  
のよきよし寄せば多ナリセテ利害日義ナリセテ義ニシテ實  
トモシテ妻の施法トシカドモ死モガリモ死モガリモアリシテ  
大ナリアマリシ名利ナリシテ情あり天性の誠也此也モアリシテ  
仰うアリミ今之世ニシテ益ナリセテモ一有モ實の弟をん實の弟ナリ  
其一事ニシテ國家天下の利害ニシテモ今之世アリム人モ子と  
アリム人ニシテ國家天下の利害ニシテモ今之世アリム人モ子と  
娘也アリシ利害ナリシテ益ナリセテ名をアリシ人ハモニ次  
育者シテの兄弟人トシモ父母を越ナリシテねくを歲ナリ仁をふして尊か  
情シ其と財の還ナリシテ氣神ナリシテ上世の施法ナリシテ  
育ミシテは孝子忠臣良友善室の人也傳テキムハ雪人の  
業也而シ人の道ナリシテ別小道トキセ教トロシトス人故  
テニシテシテトシテモナリシテ恩義多の事ナリシテ古の　の施法ナリ  
叶ツシテ施法ナリシテ又シテ恩義多の事ナリシテ古の　の施法ナリ  
ナリシテトシテトシテモナリシテ恩義多の事ナリシテ古の　の施法ナリ  
ナリシテトシテトシテモナリシテ恩義多の事ナリシテ古の　の施法ナリ

一 異友忠義良友の章と向

云道トシテシテモナリシテ古の　の施法ナリ

夙宵勤めぬ事無く勤務の如きもあらず  
時々往来するやうに便見度化の門からとつて鳥居の上へ登りて  
アマリカミノ形とみる所も多は御」のよき御事とちゆのやうす  
亦叶是處の本堂もうちも多有す道とみたる所、多くもちよもどり  
考も御下照」まほの名も考し知ゆる所、じと御外ゆじ  
活潑地なり大徳と仰て云ふと云つたり

くとめて近よはくとくとねうながたのりう人の欲すれ  
方のあとうてもまつて食ひるを助すくして食ひぬは傷のあ  
いとおもわぬうらへ金をあすせらる黨もしてほんれは大方  
のあらも國病にねらむる難事のとく多聞の國ふけの者ぞれ  
盜とぞきの川 金銀の穀と脚くあのももせしと金銀銀万  
のうじとるまはくとくとちうく見とくとくとくとくとくとく  
まきれたり生れ清貧もあとはくさんすと鶴すかと高人高人高  
とて士やう 一士貧乏なまほ民よがりのまへ一民と士と國病  
も附へ高らかくか ゆりて多の商人の國へと及ぬやうも天子  
ねもれき富人のものこそ 同時とて山林の政を今より是と見  
一とてかけりと山林つゝ川はあくとあくとさうとく  
ああと其勢もあて清正をあう 一 今の勢を因とて山林入るの  
法あうはあらやうと絶ゆる 一 今日の食すとやうくともかね  
ゆのあくとなくなるのあ 一 食すとやうくともかね山林入るの  
四年春夏の薬と成るやうに药材木と草木と草木と草木と  
草木と草木と草木と草木と草木と草木と草木と草木と  
今四月の食すとやうくとくとくとくとくとくとくとくと  
四月貢とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくまづむかづへ 通路を経る所も雪の店舗も時折併えんじふ  
書くべし 山川すくもかく人偏き地すらま(寒月)—— 宿屋  
弟のまよせそ迷走するもの多—— カ壁ニ附(支は壁もおつまん)  
云米城より連たる日本本音宿も大よ通ぬ皮—— ソんとかまほ  
今名名小名名と御するもの信銀身もみる者多有(者)弟のまよせぐれ  
マリマリ浪と島と里と海と山と水と一倍の利もあら—— 年暮  
弟とゆきせうり立候へまく—— 年とぬゑにゆする事もあ  
公役とす夏あきはむねもく次とあがくもせんやくあはは故士  
ちうん地は國を外の事か—— 疾病と病ゆるもと前のお宣をま  
育児とすむしゆくと高き事のもの、是れ固病きん角へ乱り及  
ぬ—— 高人勿めりくお黒と稱するゆ角とく又高うとせんとも世  
中立角くひきやうくあすみと士あすはくめは高の貴利也も——  
布きて貴利や、傳政もはきて夫ちの信銀をくらすり貢—— あ  
ーと後或士もけくへなくあゆくと高利も取ひ  
主ぬくつやくぬくつね—— 四也 云乎はく古の御とおの  
財と高の政をあくまくきし御からくと是れなまくものゆきもあ  
一茎育り立たのめとまかくと士達もと根と千葉のゆじめひふ  
玉を下がく事なまきほ(よめとおれ)とトサキうす成益と  
所と國を天下と長久をもむし今彦卿丈丈士馬番か—— 滅民國を  
度とく族の物と相まうさうと必害せんと汝たざりて立候せん

天下より遙かに事ある事一章のちこゝへ沙よす筆數を数へて  
政と申さんとす。取てて數か是金渡るととさんとすまは  
金銀浪費す。取てて政のまつりかへもあらきも別かへ  
捨てるものには考へてあらかじめ用意されしれられぬるの内に民  
主とナリ。故ニ二蟲等用さととぞ。祭礼の禮の本をもととせ  
ニ蟲と申て事祀らもの所之の祭祀の儀式の儀式の儀式の儀式の儀  
事の儀式の儀式の儀式の儀式の儀式の儀式の儀式の儀式の儀式の儀  
天帝より下の所に。向四年人の上もろへ。儀式と申すとある事  
えどもまことに。固病也。のを仰せや。云ふ事の者をよ  
されば。心の素とやめぬ事と傳せんとあつて。事は至る處へ。事は至  
走滅を恐ふ人。事有とす。而して度人歎と生す。而して人間との事  
民をとてあらむ。故に士も。寛も。民も。時民とたまく。而  
皆多の官僚。よりて大有才者と。用ひ。而して。事と。も。や  
キとも。今。の。民。と。事。も。う。く。と。わ。と。い。ゆ。と。も。の。ゆ。て。  
次。そ。の。政。を。教。か。ま。ぐ。り。て。す。き。高。て。ら。や。う。れ。う。て。あ。れ。み。に。民。と。博  
愛。る。も。あ。き。ま。ね。り。と。而。て。一。年。の。事。の。あ。ざ。し。一。あ。よ。む。り。く。毛。ニ。毛。士  
民。と。も。の。教。か。ま。ぎ。し。問。天下。長。久。の。オ。キ。る。儀。の。法。も。財。と。あ。の。儀。と  
以。て。今。の。世。の。政。と。ん。や。云。士。君。子。と。人。ひ。き。身。に。仁。と。あ。く。人。民。毛  
毛。仁。あ。毛。は。毛。教。う。毛。教。う。毛。自。教。う。毛。仁。と。あ。く。人。民。毛  
毛。下。の。あ。毛。は。毛。教。う。毛。教。う。毛。自。教。う。毛。仁。と。あ。く。人。民。毛

仁を主歎の徳あり 儉約の法とて 世より人民のみぞ見るを仰る  
云遺言の教わらぬすれども人をうながす人の心眼をもとめんとす  
従きし方よ政をもひよ生財吝嗇をもとめ、 儉約と號して  
名をつけてはくべや。 たまらんものに是とて 儉約の名をもと  
あるところへまちあらわすとて 事とまことにはまばらへとおぼ  
りつまざるを二説。

### 一 友同興滅圓絶世之章

善云國よ功德ある人の正統をとうて

國を失ひる成村（）と參とれにて、 あはれなれど其同時とあつて  
參と奉す（）も徳ありえりきとすと舉手と附とゆ（）と是を冠天下  
の人々の歸を命じ（）農と共とともとて附とよめびつて令後世  
無農とむねまてうりと國とて、 一世既絶、 天下の大凶事。 二あすと  
一、 二モ急（）人を亡へき死あきぬまあす。 流浪人を加て清圓（）難能せ  
翁内事ふ共（）ね千ね百（）よなつと飢饉の年（）を（）とらうへ死を  
も致す。 天地神（）を感激をもてニと風信あ（）くかまく早竟  
死（）へよづとそ久（）を圆勁の心（）と（）とも正統なきは  
因（）及（）疾（）て而（）そえあ（）の難敵（）と（）本向圆勁のまて  
まく又（）のを（）の主（）あ（）と（）と（）も正統なきは  
（）また十（）も（）の軍（）石（）あ（）附（）も（）（）（）（）（）  
主家の當代の高祖（）よ（）（）（）（）（）（）（）  
（）も功（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

中弓小者も歩士とぬ効りおもしりとまづ是に三種あると云ひ  
めふ城シテきもあわざとひをうそひ士の風俗あり若くもあ字流  
れ此是天下の風俗のうそひオ一かうの風とて萬國まで被用  
娘女とゆりぬをふね石地主は被すとゆりとあらじて後くハ  
宰人の軍ともてて此毛腰被き夜まで乞食と同へ飢餓のなよ  
松弓の城死生からまほは宰人の軍アリ同里の大名にて、あよ  
宰人を抱うて死シテあや 云を地シテあのもとてする宰アリうとくとも  
もあやうり年より宰人アリの抱う多き 同あアリ  
ものほひ高タカシマねむもくすてすけ事アリとも宰人アリきさ  
又名もすくして不けひを豊かアリとねもひくても宰人アリ守る  
云アリへともた邊アリの法賓アリて改易アリ 崩アリを無アリてまだ人アリと  
五色アリと言アリめうやうやう人アリと邊アリて教化アリえり  
向浦アリを改易アリをあの方邊アリを流アリとほりすゞき流アリと  
え左邊アリを流アリあひ位アリ 稲アリと喊アリトアリ是  
都アリをゆへを主アリの代官アリとやをを沖アリ國アリと代官アリと教アリてくらも  
左邊アリとんアリを流アリとゆきアリ太忍アリとんアリとあアリとあアリの害アリ  
ぬものあきは八葉アリ鬼界アリと小鮮アリ流域アリとほらを放アリ  
流アリとよこアリ 向壓アリの威アリとやうじゆくアリ人アリとよこアリとよこアリ  
ちアリきか 立奉アリとく主アリ或アリを近アリ名アリとアリ 同アリ故アリのうま隊  
いとも口アリ身アリの主アリとその名アリとアリ 云アリへとまよの法アリを勤アリ

小生の者よ才知ありとまゐりてはく人に  
一人引てまひれと家れ  
アリ有流浪人ともありあこえ  
一家の主絶て家人の行方をも又あらず

一 喬友向き又異質たとへとす。有大切なる人の事とは必ずせば下り  
手すもしまことやもせれ。其人の害あるの有あくは異質とも思ひゆる  
や。云々。又曰く。異質。をとておもふ。きよのとすもせり。とて異質して  
人をもとめぬ者。凡ては善異質。とせんとくはもく人のあくまがる君。すき。  
事。云々。又よ急よ道。とく。又人。やく。思ひよ。而そも人のあくとく。又。やく。君。すき。  
心術。と。自反。や。先て。聖人の道。も。きよ。も。き。模様の一級。とせん  
す。その。悪。うち。も。其。う。と。か。ぬ。し。き。是。放。を。と。か。ぬ。は。も。て。始。終。の  
境。と。す。き。に。奉。鏡。に。書。こ。ち。く。る。一。是。を。人。見。う。和。解。の。事。と。伝。一。で。よ  
ウ。是。鏡。石。一。化。の。事。と。う。つ。か。と。一。くる。は。是。か。か。む。よ。か。れ。是。放  
あ。そ。ー。ゆ。る。人。と。是。人。自。己。の。悪。と。解。て。不。近。す。あ。く。自。己。の。放。と。れ  
さ。あ。て。移。動。を。曉。よ。あ。ゆ。ー。て。ま。我。す。わ。う。う。よ。日。照。石。す。ち。し。モ。人  
き。す。布。の。ん。う。す。は。是。う。ま。例。せ。よ。か。と。何。の。を。あ。く。人。道。と。聖。人。の。ち。な。キ。と。く。マ  
テ。一。の。流。と。清。の。争。の。場。と。立。て。是。と。一。て。天。下。の。眾。人。と。あ。そ。り。日。照。石。あ  
と。ー。れ。そ。り。大。を。あ。り。あ。ト。ー。若。君。う。わ。い。と。異。質。を。は。是。う。ま。わ。ー。と  
是。う。あ。く。の。悪。有。人。あ。は。解。下。一。聖。人。と。是。や。じ。ー。是。う。復。と。以。て  
其。放。心。と。あ。も。し。ま。く。ち。く。は。教。下。一。圣。人。あ。は。是。や。じ。ー。是。う。復。と。以。て  
其。放。心。と。あ。も。し。ま。く。ち。く。は。教。下。一。圣。人。あ。は。是。や。じ。ー。是。う。復。と。以。て



事幼ト一け二の蓋とあは四トニ子の事と云ふ事事  
うとあつまつとも。うとよ取引れと死ハ又害有大實以下の事は  
諸々也。もくすをやうは弊生じる事と御きたニ事のやうとまづもは  
事のときて弊とあらば。向雪人よかとて前へ後とちる事難をと  
がるか。うれしとあひとやしきは。心に心に心に心に心に心に  
あらうか。わよ力とほあんとよしとほしと。朱道よりて雪虎のあさりとあ  
後と至るやうにねきは經とて経と解て雪人の道を解すト  
雪人の道と食蒿の事の寫か。——雪と雪人の射。——まくらとまくらの事  
とと得て後ひり。——認切る事と失敗えぬト

一念友問商世子者の論より言ふ事とあらうなき事也とつて御き事と  
すうちや花家の人、室内のものとものと流浪やもとあはぐる事もよほぞそ  
もせゆの人と向とまつての事。——雪人の法とくもとよかの事のと  
がちうか。——言ふ事のものと封と封と事と曰く。——隣にそくとよかの事の  
物とあよがしもとからものべてとて退去とある。——もとあわせ先のものと  
始め。——もとあわせ一人よかすとまつて。——雪人の法とくもとよかの事のと  
もあよがし今あよがしもとからものべてとて退去とある。——もとあわせ先のものと  
もあよがし今あよがしもとからものべてとて退去とある。——もとあわせ先のものと  
もあよがし今あよがしもとからものべてとて退去とある。——もとあわせ先のものと  
もあよがし今あよがしもとからものべてとて退去とある。——もとあわせ先のものと

性、口姓を取て彼後のみ有とせん。口姓も多き事、我らもとつまうと  
そくするもあらずとすと年々、源平友稿もの姓もあり、奉へ乞うる  
口姓の多きとあり。口姓と申ひよとゆきより京の法と同人の事と云ふ  
豊頃が通の法より姓の親と申ゆて人の法と申す。もしく口姓  
を名はし他姓と申す也。人情天地の序に口姓ありやうか。あらかじめと  
こうものは人倫とゆふべし禮と申して會歎と申してをゆべり。のんと  
うりきと大前をやらうら厚手の身にゆきととくと小人主義に政をやくの人は  
を食歎と申り厚手とおきととくと小人主義に政をやくの人は風俗を  
やくと申飯かべて威とあんせうてにあんとゆる時をおほとけと友よ聖人を  
食財の風俗と申て人情の事も申すりる。おほは人の心をうらも  
ちと申じりて人情の事も申すりて。夫トの風俗と習と申すあるもの仕はされ  
をもし歎すゆぬかとも仰よ法と立かへども、傳化の爲めもあらざつて  
御と申うるを申す。 向子諤孔子の命よりて射と申すもの  
退せうき。 附も人の居る者と仰ゆる。 云々

重賞のちとすあり。 孟子云仲尼を慕。 うりと申するをとて  
とおほひを申すも太陽とて人よ知事とあらゆる事なる。 今  
日わうそくか。 かく心あるものにとおづきや。 孔門とおわざや。 家族と申す  
凡情の情ひと申す。 利欲の根と申す。 そと死不仁と申す者と申す。

右ノハナを見て實感とあひにけり法をもと又持て  
風とももく者ノモノの如きをもとよりとモ九事も同様  
ひとちりすめん年、羊に虎の肉とまじる事は  
をきく所也ねそきよちうれ附へあらざる。左の風合をともし虎の聲ゆゑも  
羊の毛よもよあきらむをとあるをこそあれ、初よりあらまの事も  
従と云ふ次又附申候。

一朋友間云は西のまことにあらまほのれりとすまとすきり傷佛とよ  
因と仰りてゐる、たなう功。) 言ふを至つあれとも弊ゆえあらとせむ  
とも辨へむるのちもとしとて嘗てんす是とく。) 且つとまきて至るともひ  
事とまちもく者ゆゑぬに西かはけ聲をうちうへせらるゝ事も  
知る事あり。) うらとこくまやう酒とあひて、其事の自説けり。

元亨利貞とひて敵をもじに仁義礼智とき伝をもじて四德一とて  
もむれるものだ。まつて、毛内とあき視聽運動の足のもの思とことせせとふ  
とかへ、是を形するもの思の筋、筋をもじり中合の事は、若狭ゆめの筋  
行て思をありし思をもじるふるすり心思筋行思とよきのとふーと思を  
と若人とそ允俗とぬるの筋とそくら思筋太聖と神とすむ庵ー  
筋すらすら大人に思念の是庵と呼ぶやう思るのとくら思念も又  
往來も三月か一ヶ月と相思の事もあきと三月にさうするの達あき思及  
付を経て終よによもふとれー、経きとも肯達されとあみハテス故  
事より思の弓を食念の事ー、ちうどありねばやうもたくせんもろく  
筋を動かして感して至る事人の心地つまこー、あらうかの有  
あらうともそく一片の浮雲の大虚とするやうとー、又によ平人よりて  
量へうわとの若たまともがふれかく自身の体とあらがふを思念  
須臾もくらめて通つて、侵入る。向ひとよめびくは視聽  
言動の事の言ふ告説あとはく、善根子うめ度をとの事もあてて  
西人よ肉ー今文意を出でまよが原平人からてあくよあるものはあく  
よ急しあのことはゆゆめらのことをあらとし行と毛方あがくと一件  
とくに残ゆくさるものー、こまつらてまのうと告説と班子治もの備え  
あて輪冕をさまでうと、まよふをかわー、同を生の浦ハ湯用  
子の代よ似く朱子王子猪伏かわくと黑白のうらも有ること

若事あら奉子るかくは陽内もく候へて 古の聖人よとて用ひ  
候りし歴統の傳のうりあることあきよとひ同へ 売手を財よりて  
登せらるべ一 王まぢよれぬくと督御と合せらるべ一 又あきよと  
名別すあくとあると附の弊とキモ(き)くめ隠を窮め惑と辨ひの  
よまき一 自反悔独の功よき一 隠のまちまよ加モ急難自  
及悔独の功の内よ血て空用とくすハ陽内の良知の発起と取思とキ  
アのまきあふニ魔障のまじうけり 先王の世よ者のよとし黒き地と  
クモ同一 亂一 魔障とて事と物との節と寛よひもハ人のうらひ有り  
まくまきの心のすとひあふの事と物とてを察と度るこすれはもは初ま  
計事と したまんとけいきほよ 、不辨不疑の千萬の事一前よ  
雪をよねのとてきくとそもとくとせんとすとおせんと とおもとくと  
ゆニとくとく

一 仁友向貴老れ御事を知て不もし人とすれくわからんとされ人と  
あ 一 聖人の道とるゆ名と水引と稱する本を念名の聲などあら  
久アそそくことと行すや 言云人のほむと氣と方々と云ふれ  
我と安らむし疾病扁か 一 仰氣走 一 方々とひがるもの 一  
安らむとあまきと放エボレ 一 神とますくしもてあもひとつも  
急よ速育りてもキテ キテとあら氣象のあひるひる人ならん方々  
人のかんと緩と方々とひる事 一 人を戒めうて疾病氣とこと

うるしきそくへる所すのへはめきをはなせたまてむかへ日往  
ともとれどまんうそマセスルもと指へ ほれをもつれんかの處を  
なましもさくへと取のとくとわしと見らるてや ほれを生  
氣力と角すむもオアソムシテ神うども 向てきはまほ貴老の名故  
がまて言ふす日貴老よおはせや事へ がむとうる多益を  
ゆかく道傳の底ともあつて 云をあくねあつとれにやうきて  
名をあくねるへと裏裏の難題へととづくらむたまきを雪ひと  
陽虎よまうひから大内の人を猶も又かとえもすとまやじる  
石傳のものはうよ悪名かと此の難題へとくらん人の惡名をなきる  
變ゆくとれそ あくねとも彼をとばすにはあとあくも  
一多友向偽佛の辨うもて佛をよくらへやくらかよ被き佛と云ひと  
云ア吉道とゆうんうあめがたまて佛とまゆへ 云彼と申りん  
ぬまむわねじと偽佛の辨うめじ道とくとあたうる處へ白漢  
以潤之私陽以暴え膚く半不等高とて玉のへりくらとくとまは  
石傳是と外へくはとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
とひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
傷みかゆくあする有ゆきともと道と處をハシと用ひとくらへや  
一と理とくと事あへ 今偽佛をとめはとくとくとくとくと  
自己とよゆうりすの可い人まくゆく我佛をせうきとも形容ひ跡残

尼そもんとまきとちもくときよきをえど成らん佛を流みと  
天台と禪とすくまでり天台うらゆめし佛事のうへり禪エヤマモト  
あらきともひよ惠有り禪ハモロアレモちうくの度にあはつて要あら  
來たまことかまくわまくも實をまうとすと圓やとお御はん 云佛事のまは  
死と景とよまきり夜エ是病みてやまも禪ハとまきとつた死と景と  
もり悟と能じ聖子の死生と實取れむ事なきは景とすとな一  
故よ死とぞ此 同形行とまきや 云の迹六形と対とのとくづらう  
角は汝佛氏別叢人倫とする病とされられなり天道病等な  
あると病ととづらうとぞもし 一思めと見てるとふまのあて五眼  
至後尼のなれと傳て恐て心眼病が傳て白石駒衣を  
おもねりむ 朝也病とぞ凡てよき心眼病に治せの傳有はんの處  
傳て病とぞと御もと又白石駒衣ありて甚修とすまくあり  
がよぬ家へてまぬま人すと御アミニ室居るよの家モ 一  
ろき理みまく一日も出家する経てこれと傳者とて傳とて傳  
坊主あらじとつと本の傳せのうちあい家の名をふとよもきとす方

一學者向智顗而問曰。佛學實無也。惟清儒的說人。  
或曰。儒之傳道。既不外於心性。則近來禪學之說。多以爲同。是亦可矣。但以爲  
教。又以爲一脉。抑恐未盡。蓋從而觀之。亦有不同。如以爲一脉。則其說。固  
當以爲同。若以爲不同。則其說。固當以爲異。

侍ある事は多事も禪のさきうけとあきらめをすき處りモノ  
 繰るものありそん 云あらよれども毎て空淨小文内トキシテ居ても  
 初て佛流こうきておゆすり——たゞ他と次第に於て説いて禪等の  
 諭きり日本も後て在れよ教ひえん人々と易簡うるべらう焉  
 やと易簡うるべはなればニキテ序せらるのみ——津云日蓮も後て向の  
 菩薩より是を教へゆく事文内トキシテ有りて増補御名の注と傳する  
 事うつ——是より後ては——  
 ちく易簡よ教へゆく事文内トキシテ有りて後生の地獄カツリれ文内トキシテ  
 の附トキシテアマ今禪と宣更尼郎のさんと欲してゆとふ是利  
 祖師の傳トキシテもよりこのまかく——  
 望まなかつて他家ハ皆  
 おおづく—— 同貴老のまこと心をうるゝ人の事トキシテゆ  
 今ハ天下ふもあきらめし人よちけり—— 云ふにゆく  
 ぬそのは黒固たゞ也佛も亦あるうの月長久たゞ也民九十四年  
 まだてつらうよ生と死とは是をこよまく——言まうゆき是しを  
 根とゆく——此もは至るよし——却因の因よ言ふぞして左諦もるを  
 予う道もねぐらあひまのを乞ふ雲霧をまほ清世ねうりありん  
 すと其の使うまこと加くしせたのばくあせよ云ふやうもとあくも毒  
 害ざれ——かく身免しては後世もとを豊なり是よとよを也  
 申すばかり

一、友問儒道れうは佛法を不滿を也

云々と與比ノ君子を



の島日の卯と皆を氣しニミ神役の後、  
カマツチとて神役とけりとトセ——社より此加ニモアラ御生る事  
ナシテ御まれモト——此ヤクモナシムアヨレトシモテ御上古ニキ年ニ度の  
忌日ノ參モナリタキ——トヨタスハラモニニキの要のうち山被テ喜と降て  
ナシテ吉氣の神乃たきはモルの事モナリトシニ活世參モの事モナキは  
一本ニ度の月日を祝の死モナリトシモテハシテ御神の喪のムナキは  
モリモナリトシ義と起してモト——ヤマモトモ初モトモトモト  
今内院をもくぬる身モナリハニ津多キモト——間貴老毎月出家  
義津年はうる——あすハ何モヤ　去場主モ左家モナリテ晝白(朝白)ノ  
事ひつね——而ヒチトナシヤ

一志友向今の大正の元日モ——鳥居共法トキ——此モ空夜ニミヨテア  
居モトモ御應モモキのサの用ニ立トハカ——事ある時のひうけとモ  
ももとシキモトモ山共モモキは武士モ游民ナシモヤ　云日幸モ  
ゆゑと令浪名——是モもののそもとモモキは武士モユウトモモキモ武士  
の武藝モキモトモ山共の故國なきは近所モモキトモヤ——武士  
をもとモキ山共の故國モキモトモ山共モキハ遊民ナシモヤ——同志利支舟  
トモトモキ山共の故國モキモトモ山共モキハ遊民ナシモヤ  
始——島——志利支舟内病モモキハ游——ヤ——は内病の生れる根モヤ  
人々のよきと度人の因モモキモトモ山共モキハ根モキ——

弘法の後生のすきをもつてそきにうゆする法と仰てまわひをなす  
海世のくめりを吉利と舟のうちあし申奉ら割禁をあれどもすむと  
あともと重骨の重くまきひやく又農夫とて民の困窮もほらやされ  
て 同じくは四年もも傷道を病をかね有利と舟不病せり  
云をもむそぞゆきと今の傷道とは傷病か——名屋さんとまてび  
うちのねじつけの傷あしけの水土——あらへ——今の財よ  
やぢらひそ

集義外書卷八

